論　文

J. J. ルソーの思想の原点「里山」*1

中間眞司*2

中間眞司：**J. J. ルソーの思想の原点「里山」　九州森林研究　64：10－16，2011**　スイス生まれの思想家 J. J. ルソーのスローガンは「自然に帰れ」である。彼はこの信念を貫いてパリで活躍した。18 世紀のヨーロッパでは既に，原生林は人の手で，里山として機能していた。都市部では産業革命の波が押し寄せていた。ルソーは人為排斥，自然礼賛の態度こそ人間性の回復であると主張した。当時の公害問題はまだ微小で，現代に比べるとまだ自然回復力の期待できるレベルであったにもかかわらず，ルソーは現代の自然破壊を警告していた。彼の思想の背景には，つねに「里山」がある。本研究では，ルソーの生涯を成長過程と並行時期の著書を対比して省察する。ルソーの幼少・青年時代では，「里山」の自然により育まれた恩恵があったこと，文筆家の時代では「里山」で培った自然思想を著書に開花させたこと，晩年においては「里山」が人生終末期の癒しとなったことを省察する。終結として，ルソーの自然主義の標語である「自然に帰れ」について省察する。

キーワード：ジャン＝ジャック・ルソー，自然に帰れ，里山

Ⅰ．はじめに

本研究は，ルソーの生涯の足跡と関わり深い「里山」から影響をうけた自然主義に基底をもつ創作である著作ならびに先行研究を，ルソーの心情である「自然に帰れ」の思想に到達する過程として考察する。

筆者は，これらの膨大な先行研究を踏まえつつ，里山に注目しながら，実際にルソーが触れた自然（それはルソー生存から約 300 年経過しつつある現代でも往時の状態を保存していると認識される）への旅を通して，ルソーの感じた自然を体験的に導き出す手法をとる。この手法は今後も継続する予定である。

1．「里山」とは

里山とは，一般的に人里近くにあって，地域の人々の暮らしと深くかかわっており，里山，里地，田園などと呼称している。科学的な見地というよりは，情緒的な取り上げ方であり学問的な定義は見当たらない。その多くは標高の低い所に分布しており，将来にわたって森林として維持・管理されるべきところが多くあることなどが指摘されている。里山の区分は，日本では自然林，二次林，人工林，竹林などに区分されるが，近年は，里地（田・畑・果樹園），田園（湿地・ため池），小川，人間生活（民家）などを含めて里山と称している。

ルソーの執筆したフランス語からの日本語訳としては「田園」，「農村」，「里山」，「里地」など多様な語彙が用いられている。これはヨーロッパ言語圏より，日本語の方が，自然描写の点では，微細表現の単語が豊富なことに起因するものであり，日本語訳は多様で柔軟な表現になっている。本論では，ルソーの翻訳本に即して理論の展開を行うが，便宜的にルソーの意図する原義は同一と解釈することにする。

2．ルソーの里山観

『社会契約論』には「都市の地区と田舎の地区とのこの区別から，注目に値する結果が生じた。……初期のローマ人が田園生活を愛好していたことはよく知られている。……彼は耕作と軍務とを自由に結びつけ，技術，手工業，陰謀，財産，奴隷制を，いわば都市へ追放したのである。その結果，ローマの有名な人物は，ことごとく田園に住んで，土地を耕していたので，人々は，共和国の支柱となる人物を，田園にしか求めないのが習わしとなった」（*15*）とある。

『新エロイーズ』には，以下のようにスイスの里山での日常生活が描写されている。

「田舎の春はあなたが思いになるようにそんな気持ちの好いものではありません。田舎では寒さにも暑さにも悩まされます。散歩するには木陰というものがありませんし，家の中では暖炉を焚かなければならないのです。父は父でご自分の建物に囲まれていらっしゃるのにやっぱりここは町に比べて新聞が遅いということに気づいておられます。ですから誰も彼も何よりも町へ帰ることを求めていますので，四，五日後にはあなたはわたくしを抱擁なさることになろうと期待しています」（*7*）。

この描写には，ルソーがかつて偽音楽教師としてスイス，クランの里山で生活していた経験が反映されている。

ルソーの思想は一般に「自然に帰れ」と要約されるが，本人の直接の標語ではない。Britannica（*2*）には「多くの人は田園生活へ復帰すること，と考えた。ルソーのいう自然は文明批判のための規範原理であり」と記載されている。つまり，「自然に帰れ」は本論では「田園生活へ帰れ」と解釈する。

3．ルソーの業績

ルソーの業績は Britannica によると「当時の人工的退廃的社

*1　Nakama, M. : The J. J. Rousseau's philosophy beginning from the village.
*2　鹿児島国際大学大学院国際文化研究科　Graduate School of Intercultural Studies, The International University fo Kagoshima.

会を鋭く批判，感情の優位を強調した。ロマン主義の先駆をなし，思想，政治，教育，文学，音楽などの分野において根本的な価値転換作業を行い近代思想に多大な影響をあたえた」(*2*) とされている。

ルソーの名を文壇に広めたのは懸賞論文の応募で１位になった『学問芸術論』である。その後オペラ《村の占い師》の作曲を発表する。その成功によりダランベールから『百科全書』への項目「音楽」の執筆依頼があった。ルソーの没後フランス革命に影響をあたえたとされる主著は，『人間不平等起源論』，『社会契約論』，『エミール』である。『新エロイーズ』はロマン主義の先駆とされ，山岳観光を産業として発展させるに至っている。回顧録である『告白』の執筆は文学分野における自伝というジャンルの先駆である。

これらの著作群を，ルソーの生涯と，関連付けて参照していく。

Ⅱ．検　証

ルソーの生涯における里山の関係性

１．ルソーの生い立ち

写真－１．ルソーの生家（筆者頭上２階）(*23*)

ルソー家の祖先は，宗教改革の軋轢を避けてパリから逃れてきたカルバン派の宗教難民であった。ルソーは自分の誕生について，『告白』に「わたしは 1712 年にジュネーヴで，市民イザック・ルソーと，同じく市民シュザンヌ・ベルナールとのあいだに生まれた」(*12*) と記している。父は時計師であった。母はベルナールという牧師に育てられたが，２人目の子であるジャン＝ジャックを生んだあとに亡くなった。周産期死亡であった。

ルソーは父子家庭として，父から家庭教育を受けた。父との読書の中で『プルターク英雄伝説』の影響を受け，自ら「ローマ人やギリシア人」(*12*) に成りきって陶酔した。後の執筆『社会契約論』で「ローマの英雄は田舎に住む」との引用は，この父との学習ですでに学んでいたことになる。

日常の身の回りの世話は，母方のジュソンおばさんが面倒をみてくれていた。そのおばさんの歌う《にれの木かげの，チルシース》(*6*) を晩年に至るまで強く回想しており，ルソーの創作活動に影響を与えている。子ども心に，このシャンソンの中の詩の冒頭にある「木かげ」という，木の下にどこにでもある日差しを避ける場所を，癒しの場として潜在意識化したのではないかと考えられる。

２．里子のルソー

1722 年：父は，ジュネーブの街中でのケンカが原因となって，国外逃亡の身となることを選んだ。ルソーは養育放棄されたのである。母方の親戚の手により，ジュネーブ近郊のボセー村に里子に出されたが，ここで，ルソーには「田園を愛する気持ち」(*12*) が形成された。都市ジュネーブ人と農村の田園（里山）に住む人々の生活・人生観などを対比する状況に置かれた。

写真－２．迫りくる里山の風景：ボセー村 (*23*)

ボセー村は，政治的にはサヴォワに，宗教的にはジュネーヴに属していた (*12*)。徒歩旅行の場合，ジュネーヴからは田園地帯を通って，サヴォワの中心都市アヌシーからは峠を越えて共に１日で行ける距離にある。

ルソーはボセー村の里山での人間関係に癒され，性格が穏やかになったと自己分析している。以下は『告白』に見られる当該箇所である。

「この田園生活の純朴さは，友情というものにわたしの心を開いてくれたことで，じつに計りしれぬ利益があった。それまでわたしは高尚だが空想的な感情しか知らなかった。平和な静かな環境で共同生活する習慣が，わたしと従兄弟のベルナールを愛情で結びつけた。……やさしい，情味のゆたかな，平和な感情がその土台になっていた。……わたしは荒々しい感情を見もしなければ，その犠牲になったこともない。何もかもがわたしの心のうちに，わたしが自然から受けたままの気質を育ててくれた」(*12*)。

３．ルソーの出奔

1724 年：ルソーは里村からジュネーブ共和国に戻され，彫金師の親方の下に丁稚奉公に出された。父親ゆずりの短気な性格だから，修行時代もうまく行くはずはなかった。休日に友人たちと，郊外に遊びに行った帰りに城郭の閉門に遅れることがあった。翌朝の開門を待って入城して，親方のもとに帰るのであるが，そこ

でルソーを待っていたものは，懲罰の折檻であった。ルソーは３度目の失敗で，不条理な体罰を受けてまで，親方の元に帰ることをせず，仲間たちを城内へ見送って，自らは自由な放浪生活をすることを選択した。しばらくはジュネーブ近郊の農家に泊めてもらった。「わたしは２，３日は町の周囲をうろつき歩き，知合いの百姓の家などに泊めてもらった。みんな市中の人々より親切にもてなしてくれた」（*12*）と，貧乏だが情の厚い農民の，何の見返りも求めないもてなしに感動して，ルソーは放浪生活へと出奔してしまった。

４．ヴァランス夫人の擁護

1728 年：ルソーはかつて里子に出された，ボセー村と同じ宗教の教区の中心都市である，アヌシーへ放浪し，この町で，カトリック伝道者ヴァランス夫人の擁護を受けた。ここで，ルソーはヴァランス夫人から母親的な無償の愛情をうけることになる。ルソーはヴァランス夫人の紹介状により，カトリックの中心都市トリノへ派遣された。また，ルソー家の宗派であるカルバン派のプロテスタントからカトリックへと改宗した。ルソーはこの改宗を「生きていくために，食べものにありつくための方便だった」としている。アヌシーに戻ったルソーは，ヴァランス夫人の便宜で聖歌隊学校に通わせてもらった。夫人の館ではルソーは「窓から」「小川と庭の向こうに，ずっと田舎の風景が眺められ」（*12*）る良い部屋をあてがわれた。測量士補の仕事を紹介され，その地図製作のペンがのちにボタニカルアートに役立つこととなる。アヌシーはサボワ領である。後の執筆となる『エミール』の「サボワ人叙任司祭の告白」の情景モデルとして，アヌシーの里山描写が『エミール』にはある。

「それは夏のことだった。わたしたちは夜明けに床（とこ）をはなれた。かれはわたしを連れて町の外へ出て，高い丘の上にのぼった。下のほうにはポーの流れが肥沃な土地をうるおし横切っていくのが見える。かなたには，すべてのうえに，巨大なアルプスの山なみがそびえている。朝日の光がもう平野にさしてきて，野原に樹木や丘や家々の長い影を投げ，光のさまざまな変化が，人の目にふれるこのうえなく美しい光景をいっそう豊かなものにしている。まるで自然は，わたしたちの目のまえにその壮麗な景色をくりひろげて，わたしたちの話のテキストを提供しているようだった。そこで，しばらくのあいだ，無言のままそういう風景をながめていたあとで，安らかな心の人はこんなふうにわたしに語った。」（*10*）の文章に続いて，「サヴォワの助任司祭の信仰告白」の部分が展開される。

５．ルソーの自立

ルソーは，ひとりヴァアランス夫人の故郷であるスイス・クララン，ローザンヌ他で，偽音楽教師をした。それはパリからやって来た音楽家という触れ込みで貴族の仕事にありつくための方便であった。ここでのルソーの経験は，「他人に教えながら，知らずしらず自分も音楽を学んでいった」（*12*）というものであった。このように生徒に教えつつ自ら学ぶという，経験学習の実践であるこの経験が，後に消極教育論として『エミール』に論理展開される。

６．ルソーのパリ

1731 年：ルソーはアヌシーのヴァランス夫人の館に戻ったが，夫人はパリに行って留守とのことで，後を追って，ルソーもパリへ向かうが，夫人とはすれ違いであった。ルソーのパリ訪問での第一印象は「汚い悪臭のただよう狭い通り，黒ずんだ醜い家々，不潔と貧困の雰囲気，乞食，荷馬車引き，煎じ薬や古帽子を呼び売りする女，など」（*16*）というものであり，パリは汚い街という印象であった。

７．レ・シャルメットの里山

1733 年：ルソーはヴァランス夫人とともに，アルプスの玄関口シャルメットに移り住むことになる。ヴァランス夫人と過ごした家の庭を評して『エミール』と『告白』に２度にわたり描写している。以下の記述である。『エミール』には「わたしが求めているもの，それは，そう広くない一片の土地」（*11*）とあり，『告白』には「わたしの望みはこれだけだった。適当な広さの土地，庭，家のまえに湧く泉，それに小さな木立」（*12*）と記している。

この地を訪れた際のヴァランス夫人が言ったことば「あら，ツルニチ草がまだ咲いているわ」（*12*）は，ルソーにとって思い出の言葉となり，植物採集に興味を抱かせるきっかけともなった。

８．『学問芸術論』

1749 年：夏ルソーはパリから，ヴァンセンヌ城に軟禁されている百科全書派のディドロを見舞いに行く。「馬車代がないから二里を歩いた。道端の木は，枝を切りはらってあり，木陰はなく暑かった」（*13*）と記している。この徒歩の道中で木かげがなかったことに起因して，読む羽目になった新聞広告が，懸賞論文に公募する動機となった。ルソーの出世作である第一論文『学問芸術論』はディドロのアドバイスを受け，一等賞を得て，無名のルソーは文壇におどりでることになった。

９．オペラ《村の占い師》

1752 年：青年期のルソーの就職活動は音楽家を目指していた。パリでオペラ《村の占い師》を作曲し発表する。なお，このオペラに含まれる後奏曲は後にルソー作曲と伝えられるようになる《むすんでひらいて》となる。それは『エミール』中の描写をもとにして，後の音楽教育者が創作したとの先行研究がある。

ルソー執筆の台本は，里山に囲まれた里村を背景として，村娘の恋の悩みを占い師がアドバイスするという恋愛ストーリーである。フィナーレで「楡の木陰でさあ踊りましょう」（*17*）と繰り返して終わる。ここにはかつて，ルソー幼年時代に，ジュゾンおばさんの歌ってくれていた《にれの木かげの，チルシース》（*6*）の影響を読み取ることができる。

10. 『ジュリー，もしくは新エロイーズ』

1761 年：『新エロイーズ』が発表される。この書簡体小説は，スイスやサボアのアルプスを背景として田園の生活で展開する，階級差で結婚できない恋人同士の物語であり，ロマン小説の先駆である。

『新エロイーズ』にある，サン＝プルーが嵐のアルプスを旅する描写を以下に示す。

「この旅についてはお話することができません，どんな風に旅したのかほとんどわからないのです。二十里を行くのに三日かかりました。あなたから遠ざかる一足毎にわたしの肉体は魂から引き離される思いで，死の感じを前もって味わわされました。わたしは眼に映る風物をあなたに書いて差上げたいと思っていたのですが，そんなことは空しい計画です！　わたしはあなた以外に何ものをも見ませんでしたから，あなたに描いてお見せすることの

できるものはただジュリさんだけなのです。次々に引きもきらず味わってきた強い感動はわたしを絶えまのない放心の中に投げこみました。いつもわたしは自分がいない所に自分の存在を感じており，辛うじて自分のゆく道をたどり，人に道を尋ねるだけの落著きがあるばかり，こうしてわたしはヴヴェーから出発しないでシオンに着いたのです」(*7*)。

18 世紀までのヨーロッパにおいて，自然とは危険で恐ろしい場所という認識があった。細馬宏通は「アルプスは最初から登山や観光の対象だったわけではない」(*3*) と記している。そのことは，グリム童話の『ヘンゼルとグレーテル』の口減らし伝承，『赤ずきんちゃん』の野生の狼などにも怖い教訓でもって，人払いとしての里山が認識されていた。

このルソーによる執筆が転機となり，癒しの場へと価値の逆転がなされ，人々はこぞって，スイスへと観光・ハイキング・レジャー・登山・ウインタースポーツで訪れるようになった。

11.『エミール』

1762 年：4 月『社会契約論』を発表。翌 5 月『エミール』を発表。この教育論には，植物の成長を養育に例える事例が展開されている。

ルソーの植物学への専門性については，未完ではあるが『植物辞典』の断章に読み解くことができる。以下に，つぎ木に関する『エミール』と『植物辞典』の対比を上げる。「ある木にほかの木の実をならせたりする」と『エミール』(*9*) にあるが，『植物用語辞典のための断章』には「つぎ木　Greffe ── 人が手を加えて，ある樹木の液が他の樹木の通路を通るようにすること。二つの植物体の通路が同じ形態，同じ寸法ではなく，互いにぴったり合わせてつがれるわけでもないので，液は分かれて微細にならざるをえず，そこで，いっそう質のよいいっそう風味のある果実ができることになる」(*19*) とあるので，執筆時期は逆転はするが，ルソーは植物学の裏づけを根拠として，『エミール』で教育と栽培とを比較している。

12.「サボワ人叙任司祭の信仰告白」

1762 年：6 月『エミール』の内容にプロテスタントの思想があり，焚書となる。ルソーには逮捕状がパリ，ジュネーブから出て，スイスの寒村へ逃亡することとなった。『山からの手紙』でその弁明をする。

13. 逃亡地の里山

1765 年：モチエ村では，異端者として「村民から投石」を受け，退去させられる。ルソーは，さらにスイスの辺境の島サン＝ピエール島へ逃れる。『告白』にはこの島での里山での農民の日常の描写が以下のようにある。

「サン＝ピエール島は，……ビエンヌ湖の中央にあって周囲は約半里あった。せまい土地だが，島は生活に必要なおもな産物はすべて供給してくれる。畑，小牧場，果樹園，森，ブドウ畑，そして全体は，変化にとんだ山の多い地形のおかげで，各部分がみな一度に見わたせず，たがいに他をひきたて，島は実際よりも大きく見える。……この台地に長い並木道がついており，その真ん中あたりが切れて，広場になっている。ブドウの収穫期には，毎日曜この広場で，近所の沿岸の村々の全部からひとが集まって，ダンスをしたり，楽しんだりする。家は収税官の住んでいる一軒しかないが，広くて住み心地がよく，風をふせいでくれるくぼ地に立っている」(*14*)。

また，リンネの著書に影響を受け島の『植物誌』の執筆を構想した。以下に，後の日付であるが，(*18*) リンネを慕うルソーからの手紙を紹介する。「リンネへ 1771 年 9 月 21 日／自然とあなたを相手にして，田園を散歩しながら，倫理の本よりあなたの『植物哲学』から現実的な利益を得ています。あなたの著作は私の愛読の書となり，老いた少年時代を，果実や種子を集めて楽しんでいます。さようなら。自然という本を人々に聞いて，解釈し続けてください。私は，あなたのあとを追って，植物界というページのいくつかの言葉を解読するだけに満足し，あなたの本を読み，研究し，瞑想し，あなたをたたえ，心から愛します。／パリにてルソー」。このルソーのリンネへの憧れとも取れる手紙の内容からは，ルソーはこの島の里山に癒されていることがうかがえる。これはセルフ森林浴であり現代の森林セラピーの源泉とも言えるのではなかろうか。

写真－3．サン＝ピエール島の並木道（*23*）

14. ブリテン島への逃亡

故郷スイスを追われたルソーはストラスブールに滞在して，ドイツへの逃亡を支援されるが，ヒュームのプロデュースで，ブリテン島へ渡った。当初はロンドンでヒュームの擁護を受けるが，イギリスでもルソーの好みは自然へと向かい，次いでロンドン郊外，チズウィック，ドーキングを初めとして，さらに地方のザンプトン，ウットン，ダービ，ダヴンポートと，イングランドの里山を点々と北上した。

15. ルソー：臨終の里山

1778 年：ルソーはパリにおいて住み慣れた街，プラトリエール通り（現在：ルソー通り）にいた。ルソーにとっては，都会の高楼の下の民衆の雑踏の中で，自分の心理を理解しようともしない人々に囲まれての生活は，森林の中で一人孤独な生活を送ることよりも深い哀感を覚えることだったかもしれない。楽譜写しの収入で貧乏生活をしていたルソーを見かねてジラルダン公爵は，自邸のイル・ド・フランス圏のエルムノンビルであるパリの里山に招いた。ここには普通の住居用の館もあるが，ルソーの自然主義を満足させる，ロビンソン・クルーソー風の藁葺きの小屋をはじめとする，里山生活の仕掛けがそろっていた。同年 7 月 2 日ルソー没。

Ⅲ．考　察

1．ルソーの生涯と自然の木かげの関係

ルソーにとっては，おばさんの歌っていたシャンソンの歌詞にある《にれの木かげ》（*6*），ボセー村で細やかな植林行為によって造ろうとした木陰，ヴァンセンヌ城でディドロに『学問芸術論』の執筆を相談した「カシの木かげ」と，木陰が思考の創作の場となっていた。また，ルソー作曲のオペラ《村の占い師》には，「楡の木かげでさあ踊りましょう」（*17*）とある。

ルソーはヴァランス夫人のことば「あら，ツルニチ草がまだ咲いているわ」（*12*）という言葉を思い出とし，植物学に興味を抱くようになった。それは従来の有用植物だけを研究対象とした薬草学ではなく，リンネに影響を受けた生物学としての興味である。

ルソーの主著である『社会契約論』には，以下のような都市と里山の対比の記述がある。「都市の地区と田舎の地区とのこの区別から，注目に値する結果が生じた。というのは，このような区別は他に例がなく，ローマはそのおかげで，良俗の維持と支配の拡大とを同時になしえたからである。人は，都会地区がたちまち権力と名誉を独占し，やがて田園地区の格を引き下げたと思うかもしれない。だが，事実はまったく逆であった。初期のローマ人が田園生活を愛好していたことはよく知られている。この愛好心は，懸命な建国者から伝えられたものであり，彼は耕作と軍務とを自由に結びつけ，技術，手工業，陰謀，財産，奴隷制を，いわば都市へ追放したのである」（*15*）。

ルソーの大著『新エロイーズ』には，以下のように農民への憧れのような記述がある。「人間にとって自然な状態は，土地を耕し，その産物によって生活することです。田園の平和な住民は自分が幸福であることを知るだけで十分に自分の幸福を感ずるのです。人間の真の快楽はすべて田園の住民の手の届くところにあるのです」（*8*）とある。

ルソーが「自然に帰れ」というときの自然は，人間の住まない原始林の自然ではない。村人の住む里山という，人工物と自然がほどよく交じり合う関わりの環境で，生物の多様性が認められる所でなければ，人間は生きていけないことを自覚していた。本稿でたどってきたルソーの体験を念頭におけば，「帰ろう」とする自然とは，狭義には強い日差しをさける「木陰」であり，広義には都会の人工性をさける「里山」ではなかろうか。

2．ルソーの里山経営への評価

ルソーは，『コルシカ島憲法草案』において，ディオドロスからの引用で里山経営を省察している。「コルシカの島は，山がちで，森林に富み，大河にうるおされている。その住民たちは，その国土が彼らにたっぷりと供給してくれる乳と蜜と肉で体を養っている。彼らは，他の野蛮人たちよりもいっそう厳格に，正義と人道の諸原則をお互いに尊重し合っている。山のなかや木の洞（うろ）で蜜を最初に発見した者は，何びとによってもそれを横取りされないように保障されている。人々は，自分の羊にそれぞれ自分の印をつけてから原野に放牧しておき，だれもその番をしている者はいないが，それでも彼らは，いつでも確実に自分の羊をふたたび手にすることができる。これと同様な公正の精神が，生活のあらゆる場において彼らを導いているように思われる」（*15*）。

ルソーの著書において，『社会契約論』が理論編であるとすると，この『コルシカ憲法草案』は実践編と位置付けられよう。

3．ルソーが「帰れ」という「自然」

為本六花治によると「カントの『人間学』（1798）はルソーが「自然にかえれ」とは主張しなかったことをすでに指摘している」（*22*）とある。では，この言葉はなぜこれほどまでに，ルソーの言葉として流布しているのであろうか。この言葉は，表現そのものではなく，ルソー哲学を要約しているものであると考えることができるのではなかろうか。

ルソーの自然観は，生育・人生環境によって形成され発展していった。根本俊雄（*5*）は「少年時代に親しんだボセー村での自然の光景，青年時代に過ごしたレ・シャルメットでの充実した日々 ── これらの体験は，幼児期から絶え間なく揺れ動く境涯にその身を置かざるをえなかったルソーの内面に，安らぎを与え，善を教えた」と述べている。

他の一般的な哲学者と比べた場合のルソーの特異性として，ルソーは正規の学校システムで系統だって学問を修めていないことが挙げられる。ルソーは，人生経験を積みながら，初期・中期・後期の著書へと常に自己学習を経ながらの執筆であった。一般的な研究者の場合，第一論文の発表を出発点として，その研究人生において生涯ゆらぎのない一貫性が貫かれる内容を保つものである。また持論の転換を余儀なくされる事態には，それなりの宣言があるものである。ルソーの場合，大枠での主張である「自然に帰れ」という哲学においては生涯の一貫性が認められるものの，細部については必ずしもそうではない。「自然」とは具体的には何か，「帰れ」と言っているところの「自然」とはどこの何かを，後世のルソー研究者が，残された書物によって紐解こうとすると，この一見，一貫性のあるような，なさによって，一言で明確な答えが用意できないでいる複雑さがある。以下に筆者の目に留まった先行研究を数点列記する。

中里良二は「ルソーにおいては，自然ということばは，原始状態という意味での自然史的自然としても，また，人間が多くの人為によってつくられた没落に対して，直接神に由来する素朴と調和を意味する神学的自然概念としても使用されることがある。さらに自然は心理学的な概念で使われることもあり，決して一様でない」（*4*）と述べている。

また，荒井宏祐は「自然界に向けられたルソーの視線は，多くの自然描写を生み出したが，ここではその描写特性として，どのようなものが整理できるか，検討を加えてみる」（*1*）として，以下の16項目をルソーの自然観として挙げている。荒井の項目の整理に筆者が独自にルソーの人生の中に見いだした里山との関係性の見解を付加して，以下に列記する。

（1）主観性……『エミール』「わたしは存在する。そして感官をもち，感官を通して印象をうける。これがわたしの感じる第一の真実であって，わたしはそれを承認しないわけにはいかない」（*10*）。この微細な感覚は，里山の変化にとんだ自然の中に身をまかせることで研ぎ澄まされていく理性が感じ取る自然である。

（2）選択性……平和な自然と人間に危害を与える自然（*1*）。それは険しい「アルプス」よりも，のどかな「里山」を好意的自然として選択する態度に表れている。

（3）善なる自然への愛着性……『エミール』冒頭の「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが，人間の

手にうつるとすべてが悪くなる」(*9*) とあるが，「この一句は，あの周知の命題「自然にかえれ」の裏返しの表現」(*22*) である。ここでの自然とは神による天地創造であり，それは変化に富む里山にその美が集約されている。

（4）感情の反映性……『新エロイーズ』にある冬の自然の荒涼たる風景描写（*1*)。それは冬の「里山」の厳しさに対するルソーの感情をも含むものであろう。

（5）伴奏性……小説中の人物の心情描写（*1*)。ルソーの小説に登場する人物の心情描写には，里山の風景描写が伴奏役をする。

『エミール』には「初期の教育はだから純粋に消極的でなければならない。それは美徳や真理を教えることではなく，心を不徳から，精神を誤謬からまもってやることにある。あなたがたがなに一つさせないでいられるなら，……こうして，はじめにはなにもしないことによって，あなたがたはすばらしい教育をほどこしたことになるだろう」(*9*)。教育者はただ寄りそって「時を稼がないで，時間を失うこと」(*9*) だけでよいのである。それには，忙しく時間が経過する都会ではなく，時間があたかも止まっている里山の環境が必要である。この里山がルソーの消極教育論のフィールドである。

（6）回想性……愛する女性たちとの楽しい遊び場所を提供する里山。晩年の散歩中に見つけた「ツルニチ草」によってヴァランス夫人を回想する。

ルソーは，里子に出されていたボセー村を，次のように回想している。「ボセーを去ってから三十年近くというもの，多少まとまりのある追憶として，この時期のことを一度も快く思い出したことはなかった。しかし一生の盛りをすぎて老年に近くなると，ほかの記憶が消えて行くのに，この時の思い出はかえって新しくよみがえり，記憶の中に，日々にそのなつかしさや鮮やかさの度を加えてくるのを感じる。……部屋の中で働いている女中や下男，窓から入ってくるツバメ，学課を暗誦していたとき手にとまったハエなどが眼にうかぶ。……家のうしろにはひどく高くなった庭があり，家の背面はそれによりかかったようになっていた。その庭のキイチゴが窓のところに影をおとし，その枝は時には部屋の中までのぞきこむ。」(*12*) と。かつての里山生活の苦い体験ですら回想することで浄化される。

（7）空想性・想像性……『エミール』には「自然の教えは遅くなってからはじめられ，ゆっくりとすすめられる。人間の教えはほとんどいつも時期に先だってあたえられる。自然の場合には官能が想像をめざめさせる。人間の場合には想像が官能をめざめさせる」(*10*) とある。里山からの「自然の教え」は「ゆっくりとすすめられる」とはルソーの消極教育論である。なぜゆっくりとしなければならないのだろうか。ひとは，訓練されたことは早くできるようになる。教師は，他者である生徒に教える立場に立つ。その教える事柄について，他者より抜きん出ている知識，技量をもちあわせていると，他者に認められるから，教師となれるのである。人は訓練されたことは早くできるようになる。教師はすでに訓練されているが，生徒はまだ初歩的段階にある。そこで，生徒に対する教師の態度として，ゆっくりとすすめなければならない，とルソーは言っているのである。だれしも，初心者はゆっくりとしかできないからである。熟練教師に，自分自身がかつて初心者だったことを忘れるな，「初心忘れるべからず」とルソーは言っているのである。そのような観点から見た場合，競争相手の多い都会ではつい相対評価をしてしまう可能性が高い。絶対評価の環境として里山は重要である。

（8）直接性・非人工性……ルソーは，ルイ王朝でのフランス式庭園を皮肉って「森の中に河の砂がありましょうか，苔や芝草の上よりも砂の上の方が足が快く休まるのでしょうか。自然は絶え間なく直角定規や直線定規を用いるのでしょうか。彼らは自然を歪めようと気を配っても，しかも何物かの中に自然の姿を認められはしないかと恐れているのでしょうか。」(*8*) と述べている。ルソーの立場である自然主義は，直接的自然を描き出すイギリス式庭園として開花する。

（9）セルフ・リハビリ性……ルソーの心は植物のみならず「牧場，水流，森」などの優しい自然に，また「人気のない」，「やすらかな静けさ」をたたえた自然に癒される。その環境は里山である。

(10) 生来的な本能性……ヨーロッパ語族の nature 類は日本語の「自然」よりも外延が広い。その nature は「人間の本性」の意味をも含むものである。人類の祖先が原初に住み始めた原風景は，人間の本性も自然のなかに融合してしまう，現代の里山に近いものであったに違いない。

(11) 自然宗教性……『エミール』にある「サヴォワ助任司祭の信仰告白」の情景には，「草をはむ羊，空を飛ぶ小鳥，落ちてくる石，風に吹かれていく木の葉」(*10*) という里山の自然の影響が描写されている。そのような情景を神の恵みと感じるときに，「あなたはわたしが述べたことに自然宗教を見るにすぎない。……神についてのもっとも重要な観念は理性によってのみわたしたちにあたえられる」(*10*) という，混じりけのない純粋な宗教観が生まれてくる。

(12) 多義性……ルソーは自然界の事物にさまざまな意義を見出す。例えば，土地は生態作用を持つ大地であるとともに，私有に起因して不平等を生むものでもある。植物は自己実現性を持つ生命体であるが，花壇の花になれば，その文明化が本来の自然を損なう。

(13) 知的分析性……晩年のルソーが親しんだ植物学については，「植物学についての手紙」，「植物学の記号」，「植物用語辞典のための断片」，「植物学断片」などが知られている。それらは，リンネに影響をうけて，科学的に植物学を分析したものである。

(14) 社会的・政治的記号の被示性……ルソーの自然界を見る視線は里山的であるとともに，その深化としての社会的，政治的な視線でもある。里山の影響として『告白』にあるように，パリ郊外の森林体験が，社会における自然人のアイデアをもたらした。

サン＝ピエール島の里山での「強者による弱者収奪」(*13*) という地理観察には，社会保障制度の根幹をなす精神を認めることができる。

(15) 古典的美学性……ルソーの描く風景美には，近代ヨーロッパの美学が示してきた定式的な美しさが見られる。それは「ルソー的な桃源郷」である。ギリシャ，ラテンの古典文学にある鳥，水，緑，花などは「至福の風景」とされ，E. R. クルツイウスはその構成要素を六つ挙げている。それらの要素に該当するルソーにおける里山の原風景を示せば，次のとおりである。

①日蔭……《にれの木かげ》(*6*)

②樹木……「楡の木」(*6*)
③草道……パリからヴァンセンヌ城への木かげのない道（*13*)。
④泉または小川……レ・シャルメットの「わたしの望みはこれだけだった。適当な広さの土地，庭，家のまえに湧く泉，それに小さな木立」(*12*）とある。
⑤鳥のさえずり…「ローヌ河だったかソーヌ河」半での野宿で「庭の木々に夜鶯（ロシニヨル）がとまって鳴きかわしている」(*12*)
⑥草花…ヴァランス夫人のことば「ツルニチ草がまだ咲いているわ」(*11*)

（16）感官の限界と未知の存在への視線……ルソーは自然界の万物を感知するうえで，人間の感官には限界があること，それ故に，人間の感知できない未知の存在がありうることを示唆している（*1*)。

戸部松実（*20*）は，ルソーの自然観を理解するには，ルソーの著書から「自然」とは何か，「帰る」とはどういう意味か，ということを自分なりに考察し「解釈」することが必要であると論じている。

以上のことを念頭におけば，ルソーのいう「自然」とは，いわゆる「生の自然」「荒々しい凶暴な自然」であるよりも，むしろ人間と共生する「やさしい自然」であり，われわれのイメージする「里山」に類するものであったと考えることができる。

引用図書

（*1*）荒井宏祐（2008）読み直そうルソーの「自然」：86，87，88，122，中央公論事業出版，東京.
（*2*）Britannica Japan（2008）ブリタニカ国際大百科事典　小項目電子辞書版，「自然に返れ」，「ルソー」の項目，Casio Computer, Tokyo.
（*3*）細馬宏通（2006）絵はがきの時代：67，青土社，東京.
（*4*）中里良二（1962）ルソー：132，清水書院，東京.
（*5*）根本俊雄（2007）ルソーの政治思想：55，東信堂，東京.
（*6*）ルソー　井上究一郎訳（1958）告白録　上：15，新潮社，東京.
（*7*）ルソー　安土正夫訳（1960）新エロイーズ　1：72，110，岩波書店，東京.
（*8*）ルソー　安土正夫訳（1961）新エロイーズ　3：143，226，岩波書店，東京.
（*9*）ルソー　今野一雄訳（1962）エミール　上：23，132，236，岩波書店，東京.
（*10*）ルソー　今野一雄訳（1963）エミール　中：14，120，129，183，岩波書店，東京.
（*11*）ルソー　今野一雄訳（1964）エミール　下：255，岩波書店，東京.
（*12*）ルソー　桑原武夫訳（1965）告白　上：11，17，22，34，67，151，220，241，321，323，391，岩波書店，東京.
（*13*）ルソー　桑原武夫訳（1965）告白　中：119，岩波書店，東京.
（*14*）ルソー　桑原武夫訳（1965）告白　下：224，岩波書店，東京.
（*15*）ルソー　作田啓一訳（1979）社会契約論　コルシカ憲法草案　ルソー全集　5：222，301，白水社，東京.
（*16*）ルソー　小林善彦訳（1979）告白　ルソー全集　1：178，白水社，
（*17*）ルソー　海老沢敏訳（1980）村の占い師　ルソー全集　11：313，白水社，東京
（*18*）ルソー　原好男訳（1981）書簡集　下　ルソー全集　14：515，白水社，東京.
（*19*）ルソー　高橋達明訳（1983）植物用語辞典のための断章　ルソー全集　12：115，白水社，東京.
（*20*）ルソー，ジャン＝ジャック　戸部松美訳・解説（2001）不平等論　その起源と根拠，444-445，国書刊行会，東京.
（*21*）スタロビンスキー，ジャン　小西嘉幸訳（1982）自由の創出：125，白水社，東京.
（*22*）吉澤昇・為本六花治・堀尾輝久（1978）　ルソー　エミール入門：52，109，有斐閣，東京.
（*23*）写真（2006）：筆者撮影，および筆者が通行人に依頼.

（2010 年 10 月 23 日受付；2011 年 2 月 8 日受理）